

# 奥之院に立つ四恩杉の原点

三谷祥禰

日蓮宗の総本山久遠寺の傍の久遠寺駅からロープウェイに乗り、約七分で身延山の山頂の奥之院駅へ到着いたします。日蓮聖人は身延御在山の九カ年の間、この山頂より、遙か遠き房総半島の先端にある故郷、安房小湊のご両親、師の道善房を偲ばれたといわれています。私が奥之院の石段を初めて登り、お参りをさせて頂いたのは、三十年以上も前の事でした。師匠は石段の中腹辺りの左右を見ながら四恩杉のお話をしてくださいました。奥之院にはたくさん杉木立がありますが、その中で樹齢を重ねた「四恩杉」と呼ばれる巨木があります。お父さまの妙日尊儀菩提の杉。お母さまの妙蓮尊尼菩提の杉。道善御房への報恩の杉。立正安国祈念の杉。この四本の杉が四恩杉です。父の恩。母の恩。師の恩。国恩。ご恩に報いる祈りを杉の木に託す霊木であります。遙か昔のその時、奥之院の四恩杉の由縁を聴き、心が強く揺すぶられました。十代で亡くした両親のことが去来したのです。伊勢神宮にお仕える家に生まれ育ちましたが、菩提寺もあり、朝夕、ご神仏にお給仕をしていました。皇学館大学の先生方、学生さんも出入りし、「家で寝泊まりされた先生が、鎌倉八幡宮のえらいさんになった」と喜んでいた祖父の話を覚えています。お正月などの神宮行事には、白衣を着て朱の袴をはき、寒い中、素足で、参宮の人々にお札をお渡しなど致しました。祖父の育った神社のお祀りの夜には、空の米俵に入り、太い海老の足を食べながら、お賽銭が入っていると米俵の番をした幼い日のことなど思い出します。幸せな暮らしは長く続きませんでした。高校時代に、父が亡くなり、翌年に母が亡くなり、私の家はお線香の香りが充満していました。朝起きて、学校から帰っても、祖父母が灯す香りに癒

されました。お坊様がお唱えされるお経に惹かれ、お坊様と結婚すれば、親の供養がしていただけるとひそかに思い始めていました。社会生活に入り、結婚を意識する年頃になりますと、お坊様と結婚したいという思いが強くなっていました。宗派の知識もない私でした。お坊様とのご縁を持つ糸口がございません。どこかのお寺へ行き「私と結婚してくださいませんか」とお尋ねしたいほどの気持ちでしたが、そういう度胸もありません。そこで、私は祈ることにしました。すでに、この世に生まれ、どこかに生きておられるお坊様の健康を祈り、私たちの出会いを祈りました。「私を見つけてください。私はあなたに出会いたい。私はあなたを待っています」というようにお祈りしました。どれだけ経ちましたのか、それからある日、始めて出会った男性とおしゃべりをしている自分がいました。その男性は日蓮宗のお坊様でした。お蔭さまで、ご縁をいただくことが出来、めでたしめでたしとなりました。そのお方は、北海道から九州まで、各地の日蓮宗のご霊跡へ私をお連れくださいました。布教先のアメリカ本土、ハワイの寺院にも同行致しました。アジア各国へ送る文具類や日用品のお手伝いもしました。身延のお参りの時などは、まるで故郷へ帰ったような笑顔で案内くださいました。

奥之院の石段で四恩杉にであった昔日の感動を覚えています。そのころの私は、日蓮聖人のことは『立正安国論』をお書きになられたご立派なお坊様ということしか、存知ませんでした。薄霧が流れる霊山のなかで、計り知れない深淵な未来へのときめきを与えてくれました。日蓮聖人の広く深く歩まれた人生ドラマをこれから学んでいくとう嬉しい自覚でした。久遠寺本堂にお参りの時は、ご参詣者さまが、お経を朗々と暗唱されるご様子に、私は羨ましくてたまりませんでした。私もすらすらとお経を上げるようになりたいと強く思ったものでございました。

その日から三十年以上も過ぎた現在、本日の論題「奥之院に立つ四恩杉の原点」をお話させて頂く光栄に恵まれましたことを有難く思っております。「奥之院に立つ四恩杉」は、今も昔も変わりなくお立ちになっておられますが、本日の発表はその「原点」であります。まず、論題の原点を解説させて頂く前に「恩」についてお話をいたします。こ

の「恩」という言葉が日本で最初に見えるのは『金銅釈迦三尊造像記』であるとされています。ご恩は、日本人として、または、人間として、人生を語る上にも、日々の暮らしにも切り離せない人間の行動の最たるものでございます。感謝、義理人情など心を踴らす言葉の根元にあるのは「ご恩」でしょう。ご恩に応えさせていただく「報恩」には、やさしさ、思いやり、慈しみ、おもてなし、などの人道・モラル・マナーなどを感じ取ることができます。わたしたちの心にずっしりと感知している「恩」は日本で生まれた言葉であるように思っていますが、お釈迦様がお説きになられた法華経の信解品には「世尊大恩」、囑累品には「諸仏之恩」を学ぶことができます。恩を冠する熟語などはたくさんございますが、宗門の電子聖典から法華経と日蓮聖人のご遺文に関する文面を拝読し、恩への思いを探究しました。ご遺文九十一篇、語彙は三〇九個を数えています。その語彙の中で注目すべきは「四恩」であります。四恩は『四恩鈔』、『聖愚問答鈔』、『開目抄』、『上野殿御消息』に見えています。一には父母の恩を報ぜよ、二には国主の恩を報ぜよ、三には一切衆生の恩を報ぜよ、四には三宝の恩を報ぜよ、であります。この四恩の教えを語る経典は『心地観經』です。日蓮聖人が法華経の重大さを説かれ、御年三十八歳でご執筆の『守護国家論』、三十九歳の『十法界明因果鈔』、四十一歳の『四恩鈔』、四十四歳の『女人成仏鈔』、五十一歳の『開目抄』、五十四歳の『兄弟鈔』、五十五歳の『報恩抄』に心地観經が紹介されています。日蓮宗電子聖典には心地観經の説明があり、「心地観經」の正式名は「大乘本生心地観經」であります。この経典を翻訳したのは般若三蔵になっていますが、実際は靈仙三蔵という名の日本人が『心地観經』を翻訳されました。靈仙三蔵は、延暦二十三年（八〇四年）の遣唐船で入唐した最澄さん、空海さんと出航を同じくした奈良の法相宗の僧侶でした。遣唐船は大阪の難波津から出航し、九州経由で日本海を渡りました。四艘で出発して行きましたが、風任せの危険な旅でした。四艘のどの船に乗られたのか、資料は残っていませんが、二艘は難破や行方不明となり、残る二艘の数百人の乗船者と共に、最澄さん、空海さん、靈仙さんは無事唐土へ着かれたのでした。このお話の概略は十二年前の平成十七年に『祖書・注法華経』に引用の大乘本生心地観

經と靈仙三藏の生涯』の論題で発表させて頂きました。その折に、語りきれなかったところ、時間的に紹介できなかったお話などを入れさせていただきます。最澄さんも空海さんも早々と帰国されましたが、靈仙さんは当時の憲宗皇帝の命を受け、靈仙さんが五十代に入った頃、般若三藏を中心とした訳僧として長安のお寺で翻訳にかかります。貝多羅樹（ばいたらじゅ）に書かれた梵文を読み、漢字に翻訳し、用紙に書き写すお役でした。訳經にはそれぞれ役割があり、六名ほどのお坊様方と励まれました。般若三藏は高齢でしたが、用があり、故郷のカシミールへ帰ってしまわれませんでしたため、靈仙さんが中心となり、八一年、大乘本生心地観經の翻訳を完成されました。お釈迦様が靈鷲山でお説きになられたことも、經文の冒頭にあります。憲宗皇帝より、訳經の功勞により、日本人で唯一無二の三藏の位を授かったのです。その後、仏教を擁護されていた憲宗皇帝は他思想の反乱で亡くなり、中国の元和十五年（八二〇年）靈仙三藏は身の危険を感じ、中国の五台山へ逃れ、五年ほどして歿します。『続日本後記』では、「嵯峨天皇より、五台山の靈仙は黄金百両を賜った返礼に仏舍利一万粒と新經二部送る」とあります。この新經二部には『心地観經』があったのではと言われています。靈仙三藏没後、大本山清澄寺にご縁のある円仁上人が、五台山に上り靈仙の御廟と功績を知り、『入唐求法巡礼行記』に記録されました。心地観經は般若三藏譯として将来しましたので、当時の記憶から靈仙三藏のことは忘れ去られていきました。世に見る心地観經はすべて般若三藏譯と記載されています。横川の源信僧都が著した『往生要集』には「心地観經」の文が見られ、『一乗要決』には「心地観經靈仙筆受」が見えます。日蓮聖人の注法華經・信偈品の行間には日蓮聖人の墨跡「心地観經偈云八卷般若三藏譯靈仙筆受」がございします。日蓮聖人は恵僧僧都著書の書写をされておられたことで、そこに書かれた靈仙の一文をお知りになり、注法華經に靈仙三藏のことを記されたのだと受け取っています。日蓮聖人が終生だいにされた『心地観經』が平安期の日本本、靈仙三藏であることを承知されておられたのはわかりません。『心地観經』には八難が載っています。他国侵逼、自界叛逆、悪鬼疾病、国王飢饉、非時風雨、過時風雨、日月薄蝕、星宿変怪であります。『立正安国論』では

人衆疾疫、他国侵逼、自界叛逆、星宿變怪、日月薄蝕、非時風雨、過時不雨、以上の七難があり、仁王経や薬師経の名が出ていますが、心地観経の名は見えていません。『心地観経』には、心地観経卷第二の報恩品と卷第三の報恩品下に四恩が登場します。四恩の語彙は十二個見えています。当時、中国から高麗版など日本に渡って来た経典は、高野版、春日版などで呼ばれる版経として増版されますが、今度はその版経を見ながら、僧侶たちは墨で写し書きをし、それを他の僧侶が写し、当然のことながら、回し読みや經典の貸し借りは想像できます。日蓮聖人は『心地観経』の第二巻にある四恩を終生大切にされました。日蓮聖人が「恩」を信仰と布教の中心に位置付けられた『大乘本生心地観経』を日本僧、靈仙三蔵が翻訳された貴重な経本が大正二年に石山寺で発見されました。石山寺で見つかった『大乘本生心地観経』には日蓮聖人が注法華経に注記された靈仙筆受の文字と憲宗皇帝から三蔵の栄冠を賜った史実が載っています。

『大乘本生心地観経』が奥之院に立つ四恩杉の典拠、原点であることがお判りいただけだと思います。奥之院に立つ四恩杉の原点はかくも壮大なドラマを秘めていました。「四恩が、親の恩、師の恩、国の恩、衆生の恩の大切さを語るのであれば、奥之院の四本杉は父、母、師、国でありますから、四恩の衆生が入っていません」と律儀な意見を聞きましたが、その「衆生」は奥之院の「立正安国記念の杉」に集結されるでしょう。日蓮聖人お手植えの杉とされる四恩杉は大昔からの尊い宝であります。さまざまな伝承を忘れず振り返り、継承していく必要を感じています。豊かな未来への継続は、向学心、ビジョン、知的好奇心が高めてくれるでしょう。

靈仙三蔵の生誕の地、滋賀県の醒ヶ井に靈仙三蔵の記念堂が建っています。まだまだ語り尽せませんが、靈仙三蔵の記念堂の景観を紹介させて頂き、本日のお話を終わらせて頂きます。

「ご恩」についてのアンケートです。お役立てください

○×でお答えください

- 1 四恩という言葉をご存知ですか
- 2 靈仙三蔵・れいせんさんぞうという日本人をご存知ですか
- 3 ご両親へのご恩に報いたと思われたことはございますか
- 4 社会へのご恩に報いたと思われたことはございますか
- 5 世の中のためになる事をこれから何かしたいと思えますか
- 6 人様からご恩を受けたと感じられたことはありますか
- 7 日本人の僧侶が長安で経典を翻訳したことをご存知ですか
- 8 大乘本生心地観経という四恩が説かれた経典をご存知ですか
- 9 四恩という言葉は四つのご恩をいう言葉ですが

貴方様にとってのご恩とは、誰からいただいたものですか

複数の○でお答えください

親 祖父母 兄弟 子供 親戚 仕事などの関係者 日本の国

他人 先生 政治家 銀行員 廃品回収者 ホームレス

- 10 下記の人達に教えられ、または助けられたことがありますか

複数の○でお答えください

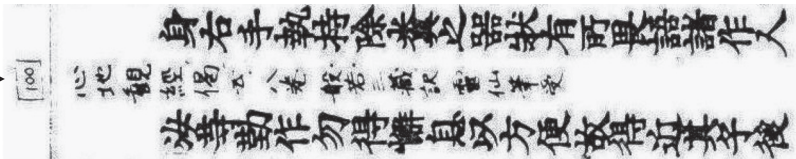
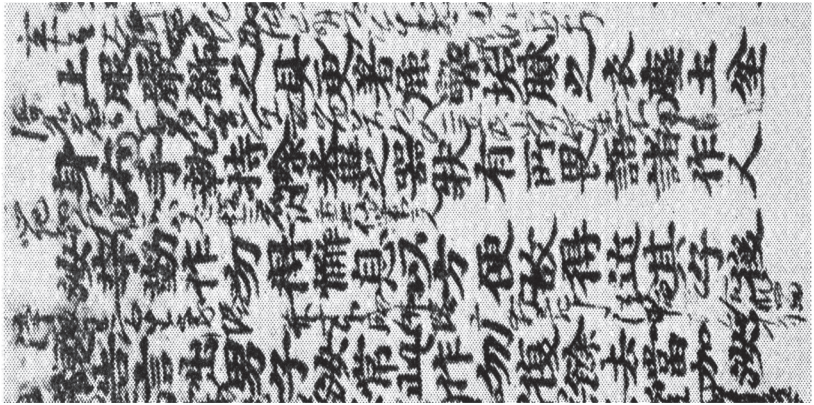
親 祖父母 兄弟 子供 親戚 仕事などの関係者 日本の国

他人 先生 政治家 銀行員 廃品回収者 ホームレス



「私集寂要文注法華經」より抜粋

日蓮聖人の注法華經信偈品第四の行間に  
「心地觀經偈云八卷般若三藏訳畫仙筆受」の  
日蓮聖人の墨跡が見られます



日本僧 靈仙三藏翻譯の大乘本生心地觀經

大乘本生心地觀經卷第一

元和五年七月三日 内出梵夾其月七日奉 詔於長安醴泉寺至矣年三月自翻譯進上

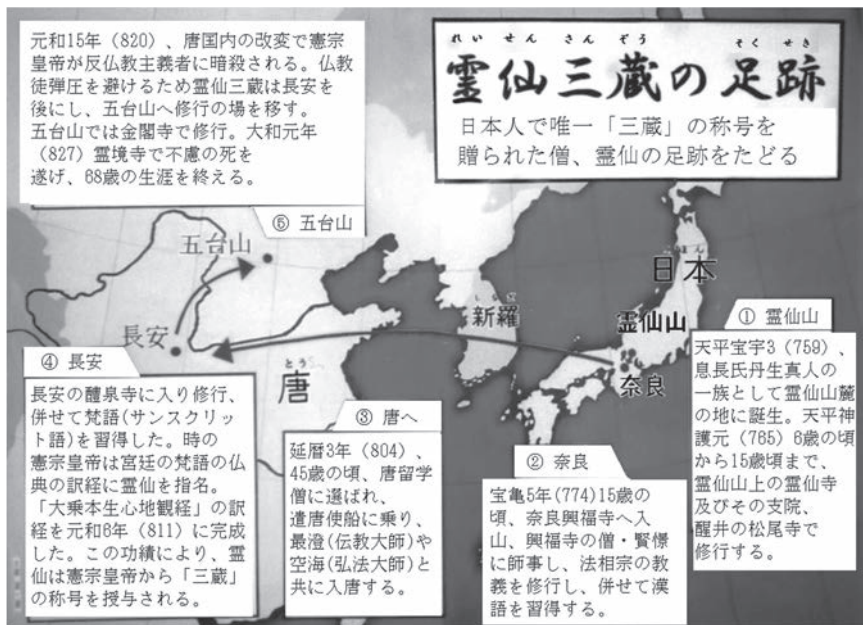
蜀賓國三藏賜紫沙門般若宣梵文

醴泉寺日本國沙門靈仙筆受并譯語

經行寺沙門令暮 潤文

右記は大正二年、滋賀県の石山寺にて古文書調査中に発見されたものです。唐の元和五年・八一〇年〜元和六年まで長安の醴泉寺にての翻譯です。憲宗皇帝が般若に宣託された梵文を日本国の僧靈仙が中心となり、筆受並びに譯語を担いました。この功勞により靈仙は三藏の位を賜りました。





### 靈仙三蔵記念堂



平成十五年竣工

滋賀県米原市山麓  
醒井養鱒場奥



(記念堂内部)

#### 参考文献

- 日蓮宗電子聖典(日蓮宗)
- 私集取要文注法華經上巻
- 國譯一切經(經集部六)大東出版社蔵版
- 大唐新翻譯大乘本生心地観経(宮内庁書陵部蔵)
- 靈仙三蔵と幻の靈仙寺(さんどう会編)
- 四恩説の再検討(松永有慶著)
- 心地観経通解(本多日生著)